誕生地遺跡発掘調査概要Ⅴ

２００３．３

千早赤阪村教育委員会

誕生地遺跡発掘調査概要Ⅴ

２００３．３

千早赤阪村教育委員会

はしがき

大阪府下で唯一の村である千早赤阪村は、楠木正成が山城を築き幕府軍に応戦した地、南北朝動乱の舞台の１つとなった地として『太平記』などの書物によって広く知られています。その楠木正成の生誕の地という伝承が残る楠公誕生地遺跡において、今年度公共事業に伴う発掘調査を行いました。これまでに楠公誕生地遺跡からは多くの中世の調査成果を得ていますが、今回の調査では、古代の調査成果を得ることができました。本報告書はこの成果を記したものです。調査の実施及び遺物整理にあたっては、多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。今後とも本村の文化財行政にご理解・ご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

平成15年３月

千早赤阪村教育委員会

教育長　大　西　清　和

例　　言

1　本書は、平成14年度に行われた本村福祉施設「いきいきサロンくすのき」建設に伴う埋蔵文化財調査の概要報告書である。

2　調査は、千早赤阪村教育委員会　指導課　主事　和泉大樹　を担当者として、平成14年５月７日に着手し、平成14年７月15日をもって終了した。引き続き遺物整理を行い、平成15年３月31日に完了した。

3　本書の執筆・編集は和泉が行った。

4　調査の実施及び本書の作成にあたっては次の方々の参加を得た。(順不同・敬称略)

岩子勤・岩子苑子・谷口夫抄子・福田夏子・周藤光代・前川篤史

5　現地調査及び遺物整理において下記の機関・方々にご協力頂きました。記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略)

大阪府教育委員会・千早赤阪村役場民生部福祉課・千早赤阪村教育委員会管理課

6　挿図の方向は国土座標に基づく座標北を示し、標高はＴ．Ｐで表示した。

7　第２図周辺遺跡分布図の桐山遺跡は現在範囲が拡大しているが、本書では拡大前のものを用いている。

目　　次

はしがき
例言
目次
1．はじめに
（1）調査の契機……1
（2）調査地周辺の地形……1
（3）調査地周辺の歴史的環境……1
2．調査成果の概要
（1）調査区の概要……4
（2）調査区の層序……5
（3）主な検出遺構と出土遺物……5
（4）遺物包含層出土の遺物……17
3．おわりに……18

挿図・写真目次

第1図　千早赤阪村位置図……1
第2図　周辺遺跡分布図……3
第3図　調査区位置図……4
第4図　調査区模式断面図……5
第5図　調査区遺構平面図……6
第6図　住居跡01・02平面図・断面図……8
第7図　住居跡01・03出土遺物実測図……9
第8図　住居跡03平面図・断面図……10
第9図　建物跡01・溝01・平面図・断面図及び溝01出土遺物実測図……11
第10図　溝02平面図・断面図及び遺物出土状況写真……13
第11図　溝02出土遺物実測図……14
第12図　溝03断面図及び出土遺物実測図……16
第13図　遺物包含層出土遺物実測図……17

写真１　調査区北側全景……6
写真２　調査区西側全景……7
写真３　調査区東側全景……7
写真４　住居跡01・02……8
写真５　住居跡03……10
写真６　建物跡01・溝01……11
写真７　溝03……16

図　版　目　次

図版１　住居跡01・03出土遺物
図版２　溝02出土遺物
図版３　溝02・03出土遺物
図版４　遺物包含層出土遺物

1. はじめに

（1）調査の契機

平成14年度、千早赤阪村大字水分263番地に所在する本村社会教育施設「くすのきホール」の東側、大字二河原辺８番地－１に福祉施設「いきいきサロンくすのき」が建設されることとなった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「楠公誕生地遺跡」の範囲内であったため、それに伴い事業原因課である千早赤阪村役場民生部福祉課から埋蔵文化財発掘の通知が提出された。過去に「くすのきホール建設」に伴う事前調査において14世紀代の２重の堀を巡らせる建物跡を検出していることなどから、当該地においても中世の遺構・遺物の検出が予想された。調査は平成14年５月７日～９日及び平成14年６月５日～平成14年７月15日の期間で行った。調査面積は500㎡であった。なお、調査に係る経費は事業原因課が負担した。

（2）調査地周辺の地形

千早赤阪村は大阪府の南東部に位置する。行政区では北・西・南側を河南町・富田林市・河内長野市と、東側を南北に連なる金剛山地を境に奈良県御所市・五條市と接する。その金剛山地から北へと延びる丘陵状山地上、千早赤阪村大字二河原辺に調査地は位置する。

調査地は大和川の支流、石川へ合流する小河川の１つである千早川・足谷川・水越川の合流点付近、詳細に記せば足谷川と水越川の間の中位段丘である河南台地と呼ばれる台地上に位置する。この地区の人々は中位段丘礫層の間の砂層等溜水を井戸を掘り汲み上げて生活していた。また、付近はこれらの河川の浸食作用により階段状の地形、いわゆる河岸段丘が形成されている。

（3）調査地周辺の歴史的環境

本村では現在旧石器・縄文・弥生時代の生活痕跡はほとんど確認されていないものの、楠公誕生地遺跡や大廻遺跡などから縄文時代後期磨消縄文の深鉢片や石器類が数点出土している。とりわけ調査地の周辺ではサヌカイト片が採集できたり、発掘調査時も包含層からサヌカイト片がよく出土し、北東に位置するサヌカイトの産地である二上山の山麓の集落としての姿が明らかになる日もそう遠くないのではなかろうかという感を受ける。また、巨視的に周囲を見れば約２km北側に位置する河南町の神山遺跡からは縄文早期押型文土器・前期条痕文土器・後期磨消縄文土器などの土器片が出土している。同じく河南町の寛弘寺古墳群でも落し穴などの遺構が検出されている。

第１図　千早赤阪村位置図

調査地周辺の古墳時代の遺跡は森屋古墳群・御旅所北古墳・御旅所古墳・浄心寺山古墳などがある。調査地北側に位置する森屋古墳群は６基あったとされているが、いずれの古墳も昭和20年代に道路の設置やみかん山の開墾などにより消滅している。しかし、中村編年Ⅱ型式１・２段階の脚付有蓋子持壺・台付壺、同３段階の子持器台などが付近から採集されている。調査地の北東に位置する御旅所北古墳・御旅所古墳は本村で発掘調査を行った唯一の古墳である。調査は昭和56・57年に行われており、御旅所北古墳からは周溝や縄掛突起をもつ組合式家型石棺２基が確認されている。調査地の南西に位置する浄心寺山からはみかん山開墾時に中村編年Ⅱ型式５段階の杯蓋が採集されている。

史跡赤阪城跡・森屋西遺跡・御旅所遺跡などからは飛鳥・奈良時代の遺物・遺構を確認している。史跡赤阪城跡からは丘陵の裾部を調査した際に飛鳥Ⅰ・Ⅱ、平城段階の土器が出土している。森屋西遺跡からは詳細は不明であるが、みかん山開墾時に蔵骨器と考えられる有蓋の須恵器が採集されている。調査地の北東側に位置する御旅所遺跡からは奈良時代の掘立柱建物や溝が確認されている。

本村は南北朝動乱の舞台の１つとなった場所であり、多くの中世の遺跡が存在する。山城跡は昭和９年という比較的早い段階で史跡指定を受けた千早城跡・楠木城跡（上赤坂城跡）・赤阪城跡（下赤坂城跡）をはじめ、二河原辺城跡・本宮城跡・しょうぶ城跡・枡形城跡・猫路山城跡・国見山城跡など多数存在する。館跡と考えられる遺跡としては、楠公誕生地遺跡や桐山遺跡などがある。楠公誕生地遺跡は平成３・４年にかけて「くすのきホール」建設に伴って発掘調査が行われており、14世紀の２重の堀に囲まれた建物跡を確認している。また、付近には「楠公産湯の井戸」の伝承地が残る。桐山遺跡は建武の中興以降の楠木邸跡と伝えられており、「古屋敷」・「花屋敷」・「光明院跡」などの小字名が残り、中世の瓦や土器片が採集されている。他にも森屋西遺跡・矢場武遺跡・曼荼羅院跡・出合遺跡・川野辺遺跡などの中世の遺跡がある。また、矢場武遺跡の周辺には「矢場武」・「甲取」・「城ヶ越」など城跡と関連があると考えられる小字名が残る。

これら埋蔵文化財包蔵地・伝承地などの他にも、森屋惣墓にある河南町寛弘寺神山墓地の正和四年の銘のある五輪塔とほぼ同じ時期の石造五輪塔「寄手塚」や南北朝時代のもので、反花基壇上に塔を備え、大和系の製作手法が伺える石造五輪塔「身方塚」などの石造文化財や建水分神社など多くの文化財が点在する。

【参考文献】

和泉大樹　2000「千早赤阪村の山城　上赤坂城跡採集遺物」『摂河泉』第30号

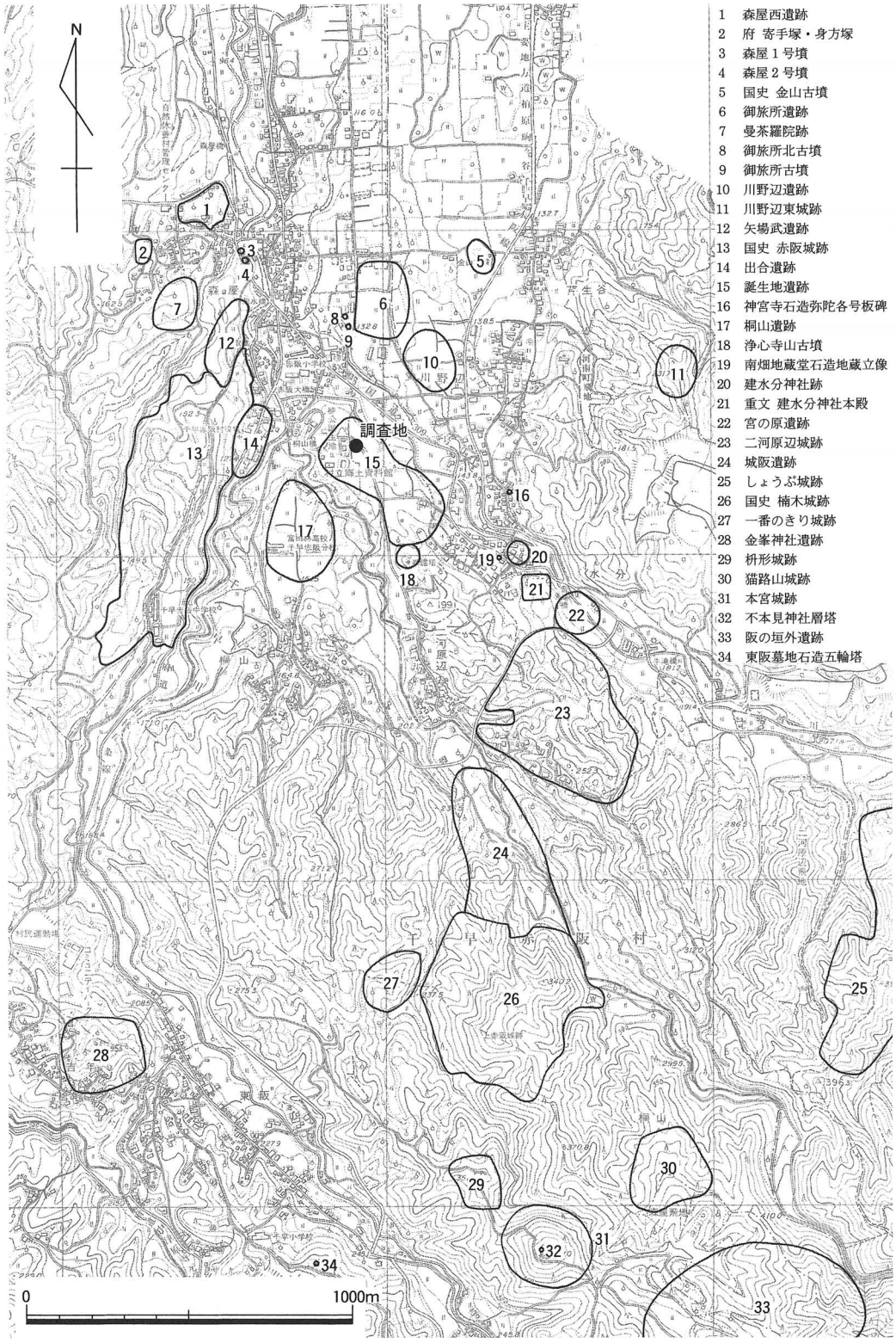
和泉大樹　2001「千早赤阪村の消滅した古墳」『誕生地遺跡発掘調査概要Ⅲ』

尾谷雅彦　1996「御旅所遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究Ⅵ』

千早赤阪村教育委員会　1983『御旅所・御旅所北古墳調査報告書』

千早赤阪村教育委員会　1995『誕生地遺跡発掘調査概要Ⅰ』

千早赤阪村村誌編さん委員会編　1980『千早赤阪村誌』千早赤阪村役場



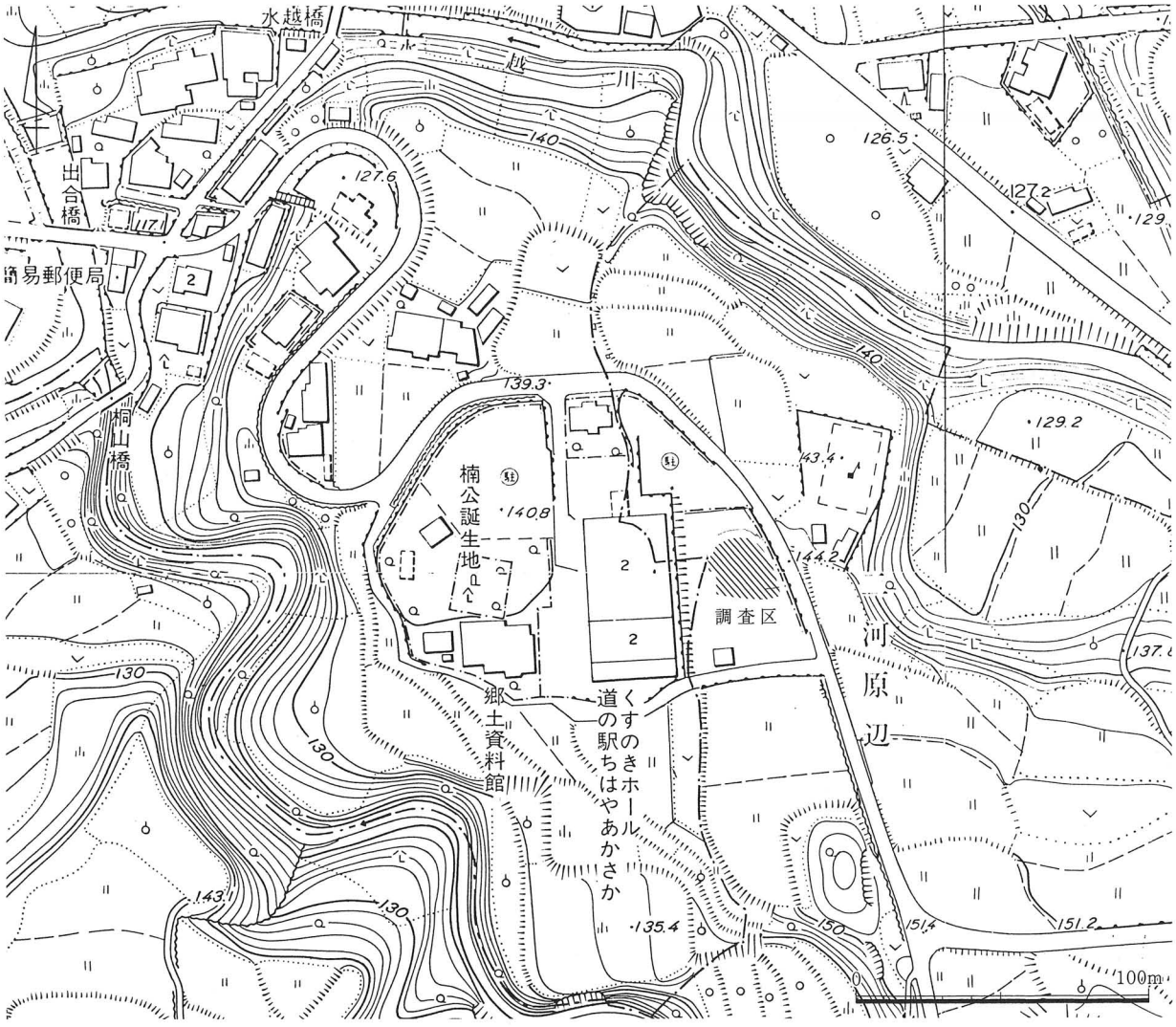
第２図　周辺遺跡分布図（１／2,000）

2．調査成果の概要

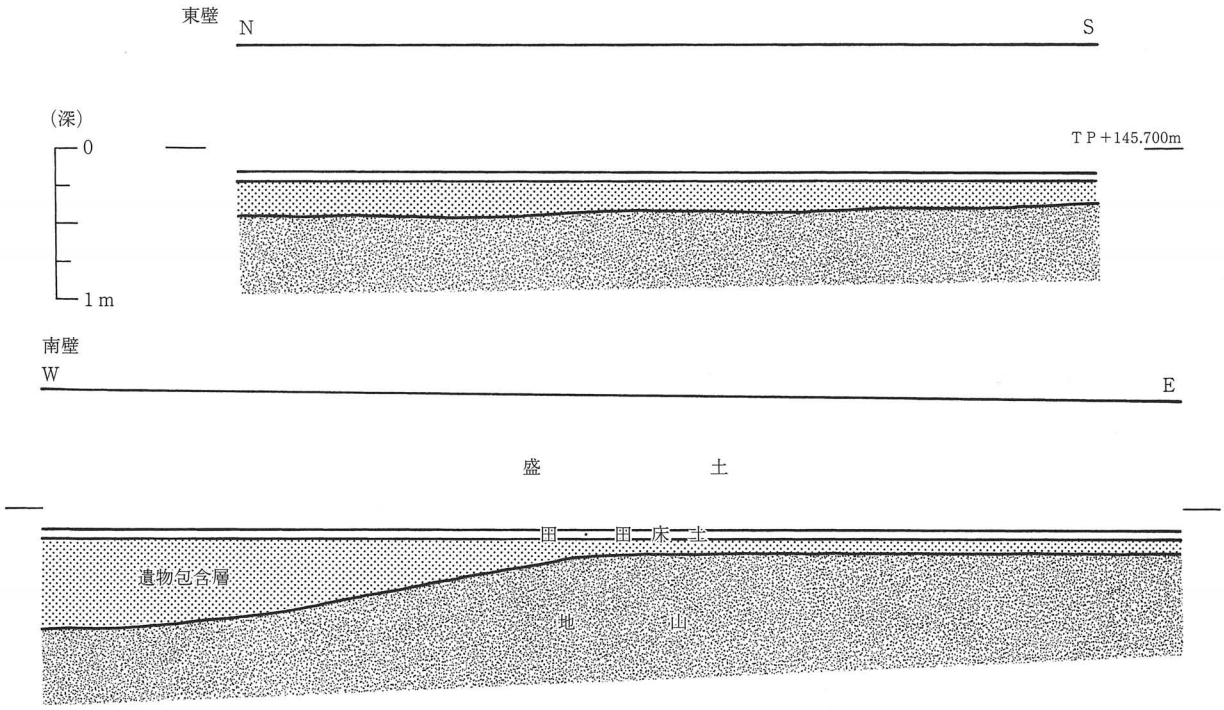
（1）調査区の概要

楠公誕生地遺跡においては先に記したように既往の調査で中世の遺構・遺物が大半を占めていたため、今回の調査でもそれらを意識して調査に着手した。しかし、調査区からは古代に属する多くの遺構・遺物を検出した。本村では古代の生活痕跡の確認、とりわけ遺構の検出は稀であり、そういう意味で今回の調査成果は重要なものになると思われる。

500㎡を測る調査区は、金剛山地から派生する丘陵上に位置する。すぐ西側の２重の堀で囲まれた建物跡を検出した平成３年度の調査区とは約５ｍの比高差がある。南側に高く北側へと標高をやや低くする調査区は、北端では大きく攪乱を受けるが、中央から南側にかけては良好に遺構が残存していた。検出した遺構は住居跡・建物跡・溝・土抗などであった。調査区の中央部をほぼ東西方向に流れる溝よりも北側に柱穴は多く検出され、２間×３間のプランの建物跡が確認できた。住居跡は３棟検



第３図　調査区位置図



第4図　調査区模式断面図

出した。このうち北側の2棟は切り合い関係にある。溝については概ねほぼ南北方向のものと東西方向のものに2大別できる。遺物が出土した遺構は64を数えるが、多くは小破片であり時期を確定するには至らなかった。この報告書では遺物が顕著に出土した遺構などを中心に記述することとする。

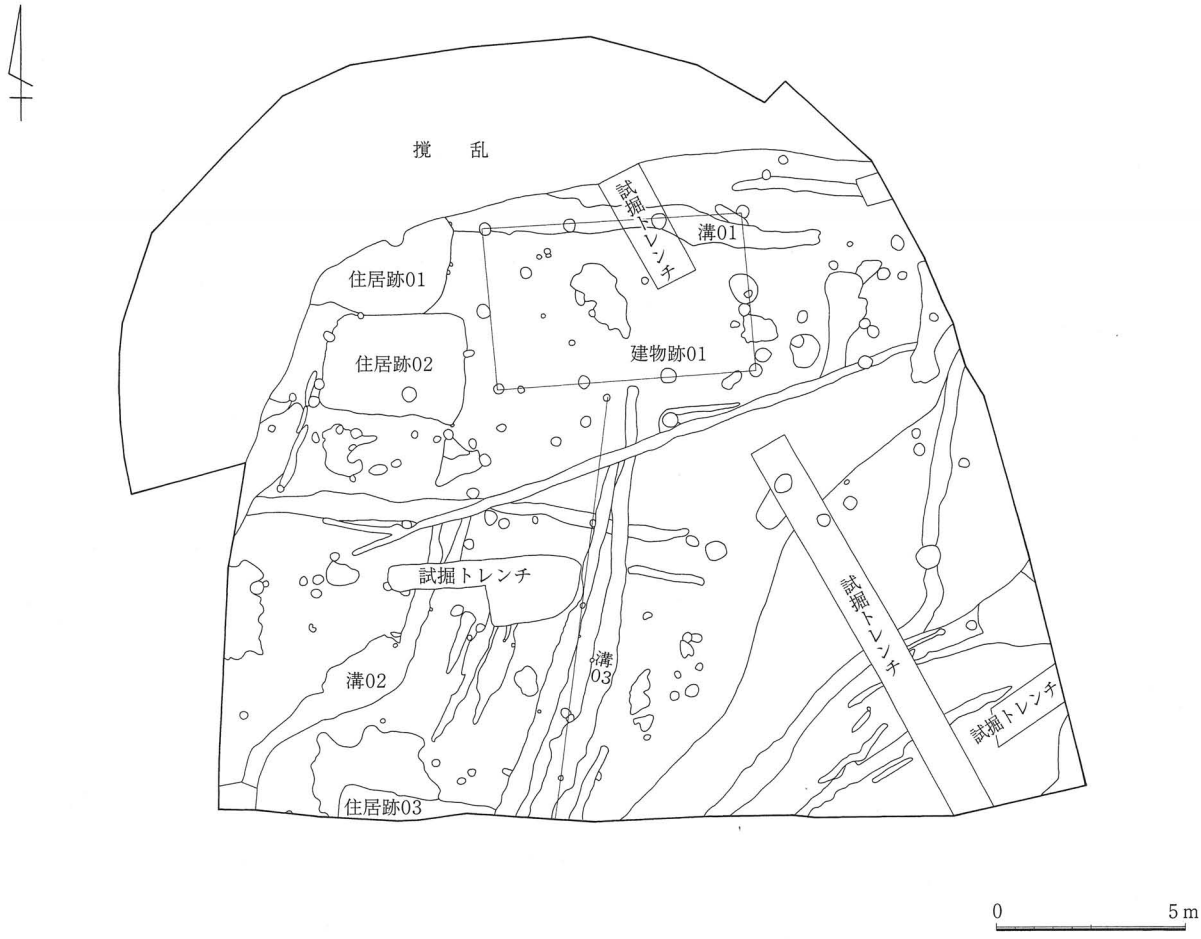
なお、遺構はすべて地山面で検出した。

（2）調査区の層序

当該地は調査以前にはグランドであったため、それに伴う造成土が地表面から深い箇所で80cm程盛土される。その下位に水田土・水田床土が水平に堆積する。これらは調査区全体で一様に確認できる。地山は調査区南東で最も高く北西に傾斜しており、灰色粘質土などの遺物包含層の堆積もこの地形に制約を受けた様を呈する。南東で浅く堆積する遺物包含層は北西へとその堆積を厚くし、分層をも可能にする。遺物包含層からは縄文時代から近世に至る時期の遺物が出土した。これらの包含層の直下で地山を検出した。

（3）主な検出遺構と出土遺物

先にも記したようにこの報告書では遺物が顕著に出土した遺構を中心に取り扱う。以下、それらについて記述する。



第５図　調査区遺構平面図

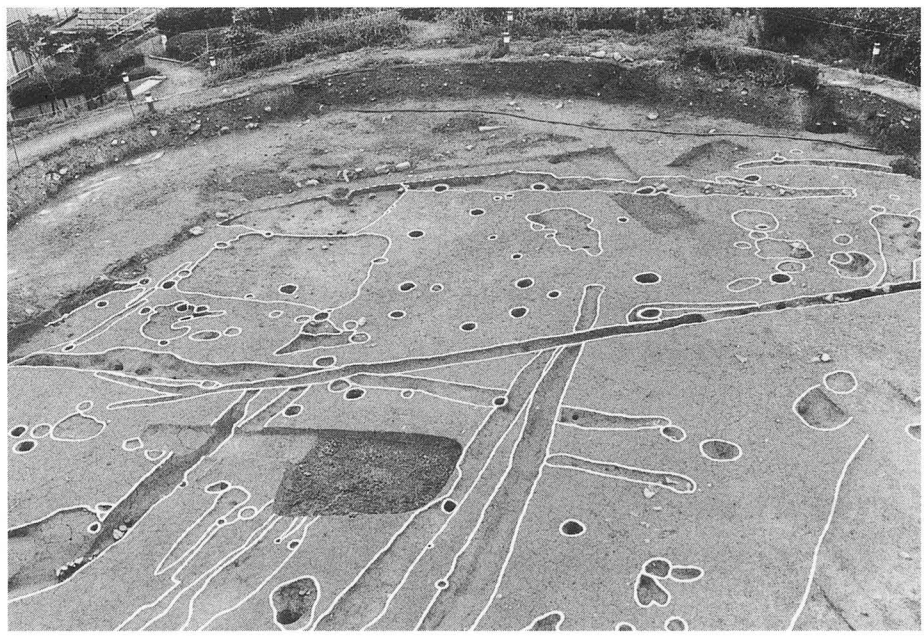


写真１　調査区北側全景

写真２　調査区西側全景

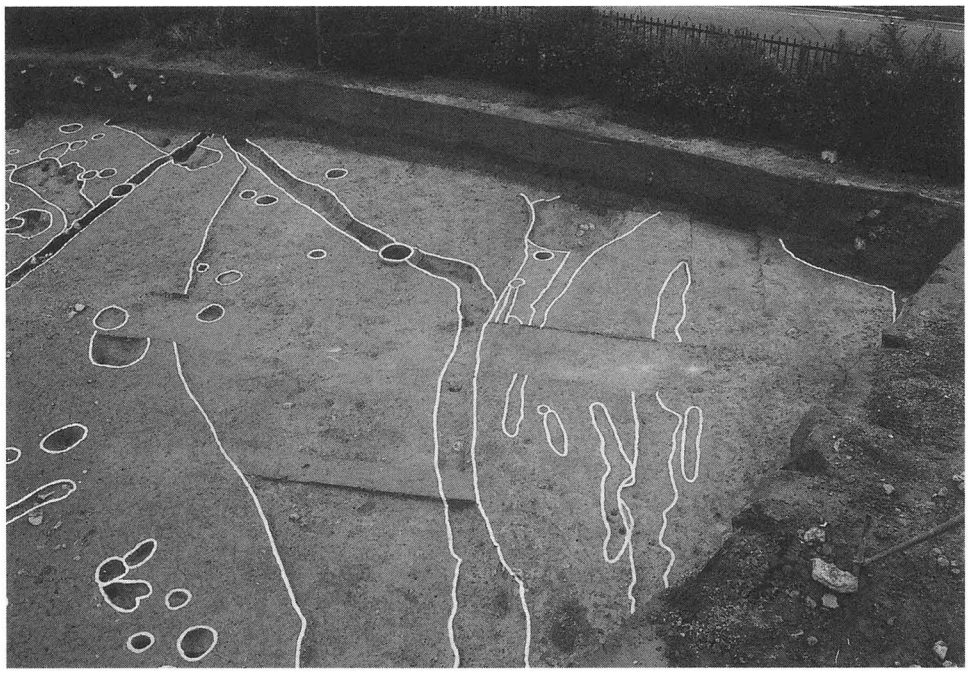


写真３　調査区東側全景

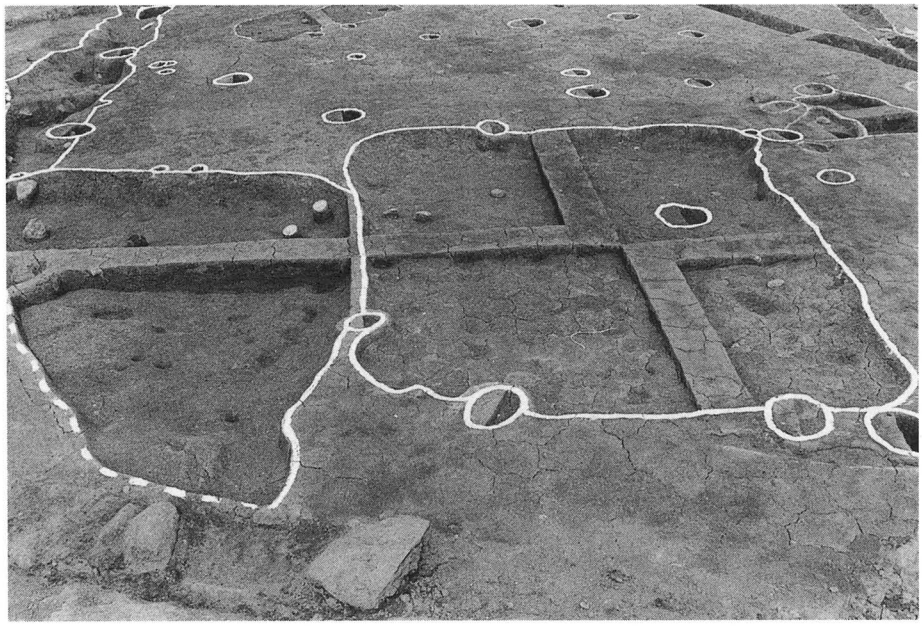
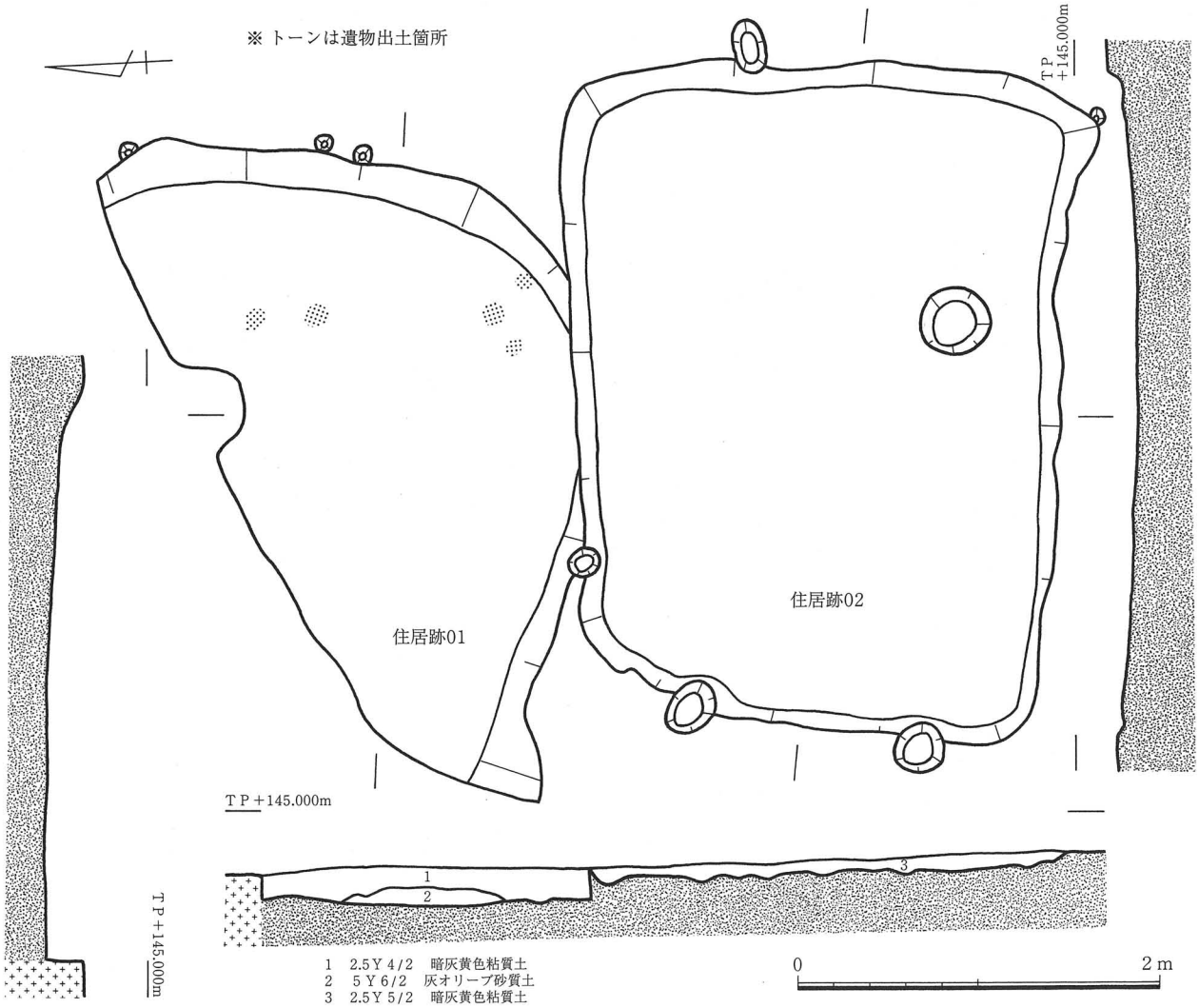
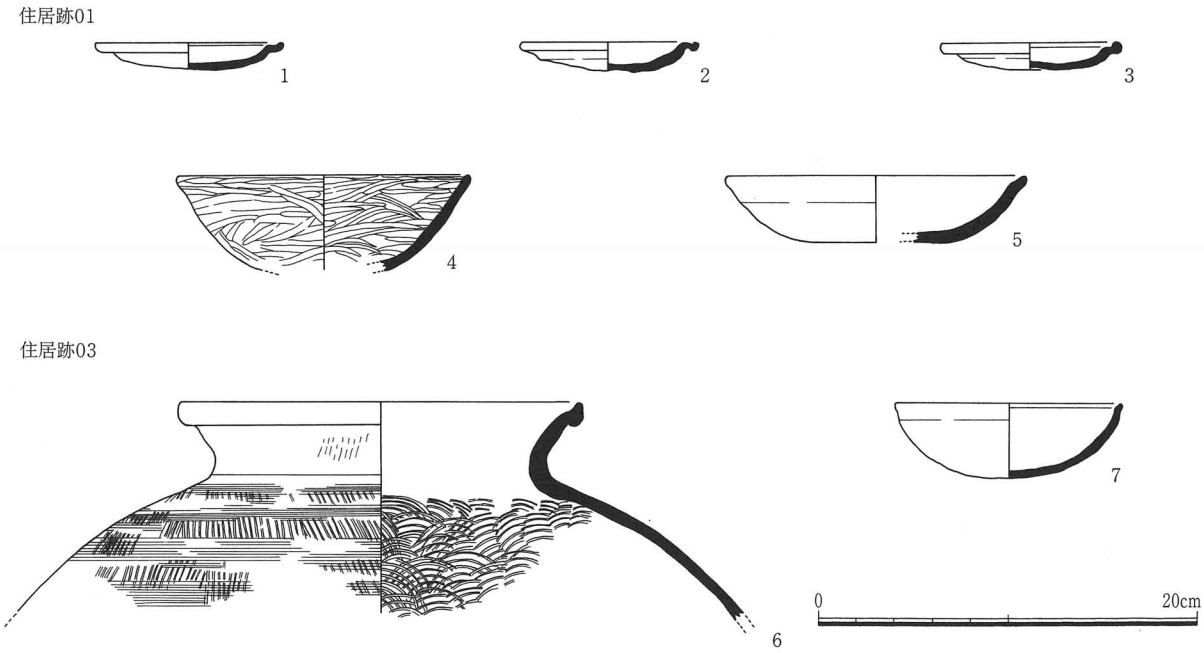


写真４　住居跡01・02



第６図　住居跡01・02平面図・断面図



第７図　住居跡01・03出土遺物実測図

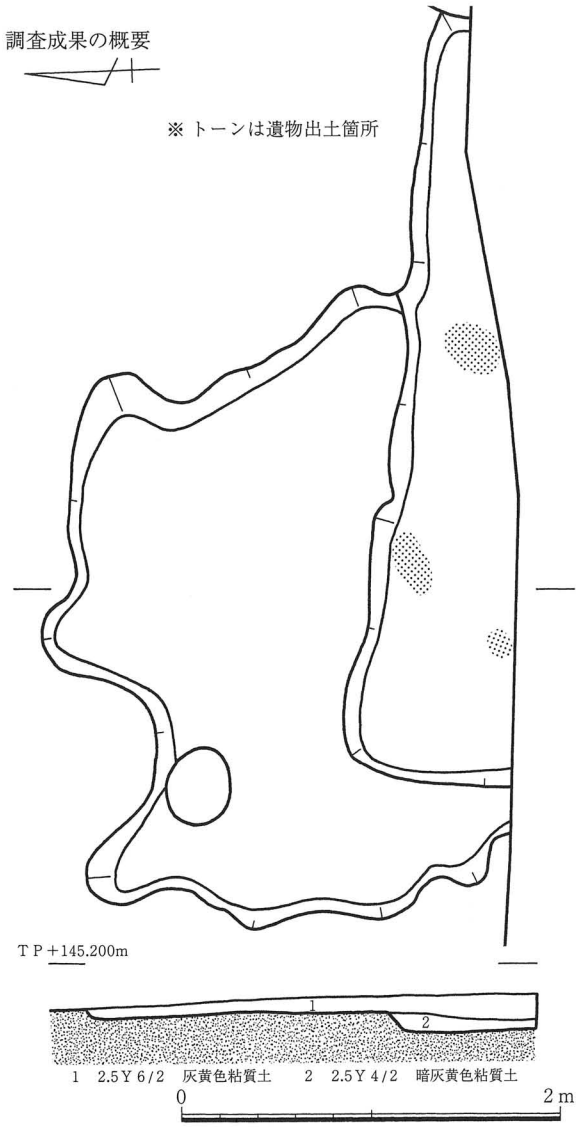
【住居跡01】

調査区の北西隅で検出した。遺構は北・西側に攪乱を受け、南側を住居跡02に切られるため遺構の全貌は明確でないが、切り合い関係にある住居跡の形状などから察すると平面プランは隅のやや丸い方形を呈すると推測できる。東側側壁に沿って直径約10.0cm・深さ約5.0cmの大変小規模な柱穴が伴う。これらのうちの２基は20.0cmと間隔を密に配置される。壁溝は確認できなかった。遺構埋土は２層に分層できる。中央部に灰オリーブ砂質土が皿状に堆積し、それを覆うように暗灰黄色粘質土が堆積する。

遺構の東側で検出した遺物を第７図に図化、掲載した。１から３は口縁端部が玉縁状を呈する「ての字状口縁」の土師器皿である。いずれも手づくね成形で乳白色を呈する。各々、口径9.7cm・器高1.4cm、口径9.2cm・器高1.5cm、口径9.3cm・器高1.4cmを測る。４は器面全体にヘラミガキを施し、内外面ともに黒色を呈するタイプの黒色土器である。底部以下を欠する。復元口径は15.1cmを測る。５の土師器皿は復元口径15.5cm・器高3.4cmを測る。口縁端部がやや外側へ開く。概して11世紀代の時期を考えたいが、５については明言できない。

【住居跡02】

先の住居跡01を北側で切る。長さは東西に3.7m、南北に2.7m測り、やや東西方向にながい方形の平面プランを呈する。側壁に沿って柱穴が数基伴う。また、遺構中心からやや南南東へ振った箇所の床面で直径36.0cm、深さ30.0cmを測る柱穴を１基検出した。住居跡埋土は暗灰黄色粘質土のみで先の住居01に比して掘り込みは２分の１程度と浅い。また、明確には壁溝は認められなかったが、断面



第８図　住居跡03平面図・断面図

図で図化しているように若干の溝状の窪みは確認できる。土師器小片などの遺物が出土したが時期の限定及び図化・掲載には至らなかった。

【住居跡03】

調査区の南端、先の住居01・02から約10.0m南下した箇所で検出した。遺構は一部を検出したのみで全貌は明らかでない。平面プランは住居跡02に類似するが、東西方向に4.0mを測り、規模はそれに比してやや大きくなる。住居跡北西隅に取り付く形で不整形な遺構が確認できる。性格等は不明である。壁溝は検出していない。

遺物は数点出土し、第７図に２点図化、掲載した。６は須恵器の甕である。口径20.7cmを測る。体部内面には円弧状の叩き目文、体部外面には平行の叩き目文が確認できる。７は土師器椀である。復元口径11.8cm、器高4.0cmを測る。体部外面から底部に指押さえの痕跡が僅かに残存する。器面の劣化が著しく暗文の有無については明確でない。口縁部は先端でやや外傾する。

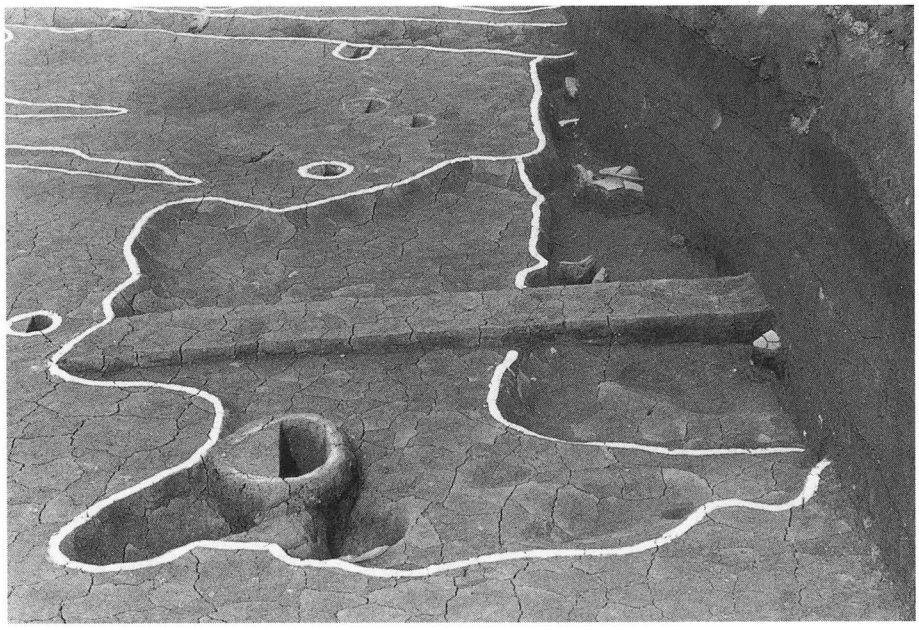


写真５　住居跡03

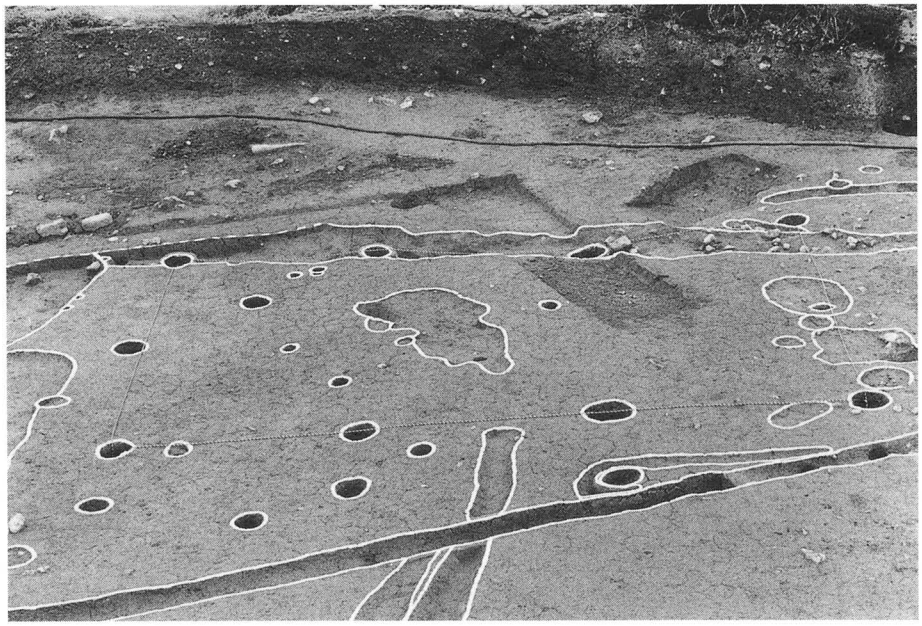
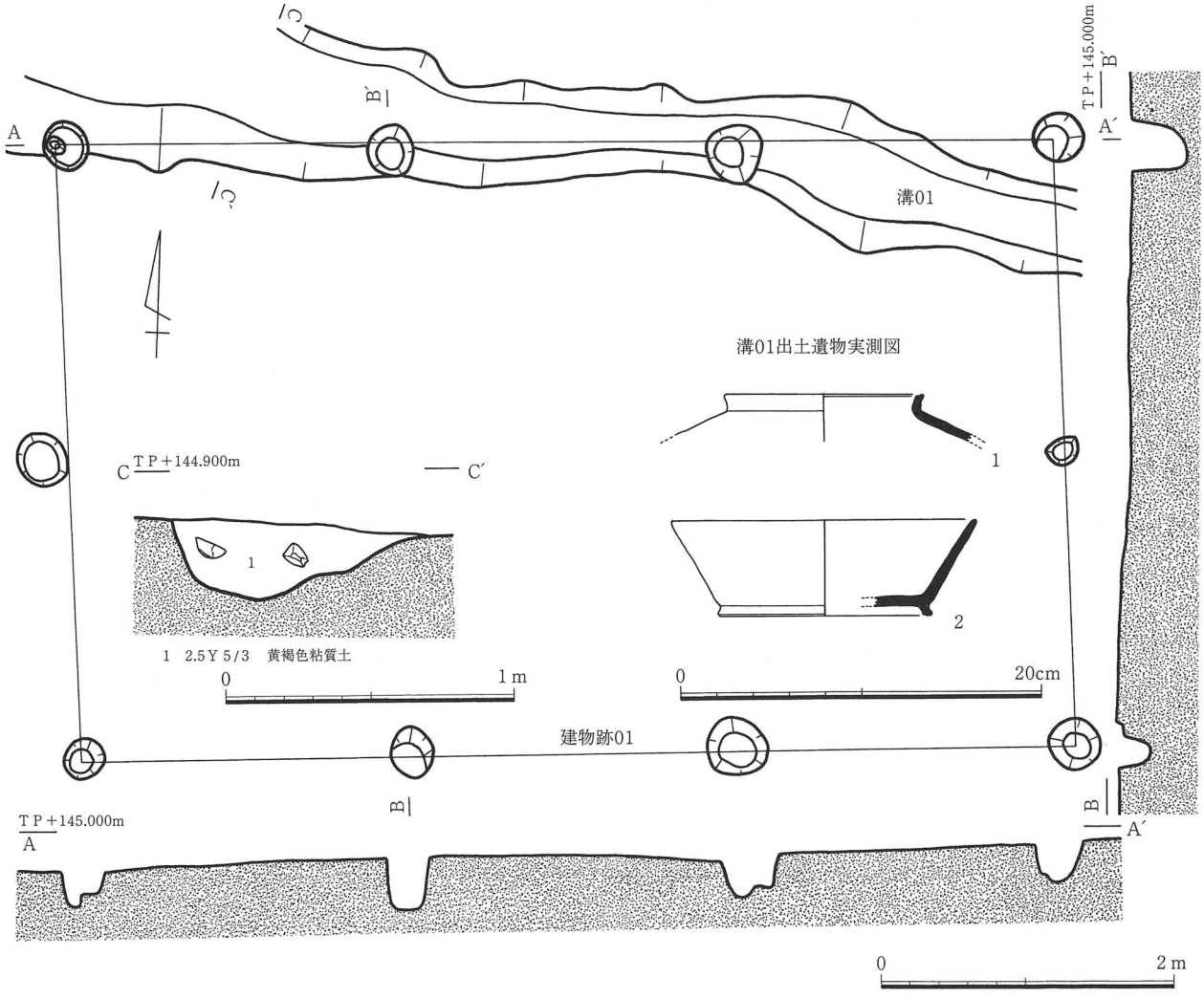


写真６　建物跡01・溝01



第９図　建物跡01・溝01・平面図・断面図及び溝01出土遺物実測図

【建物跡01】

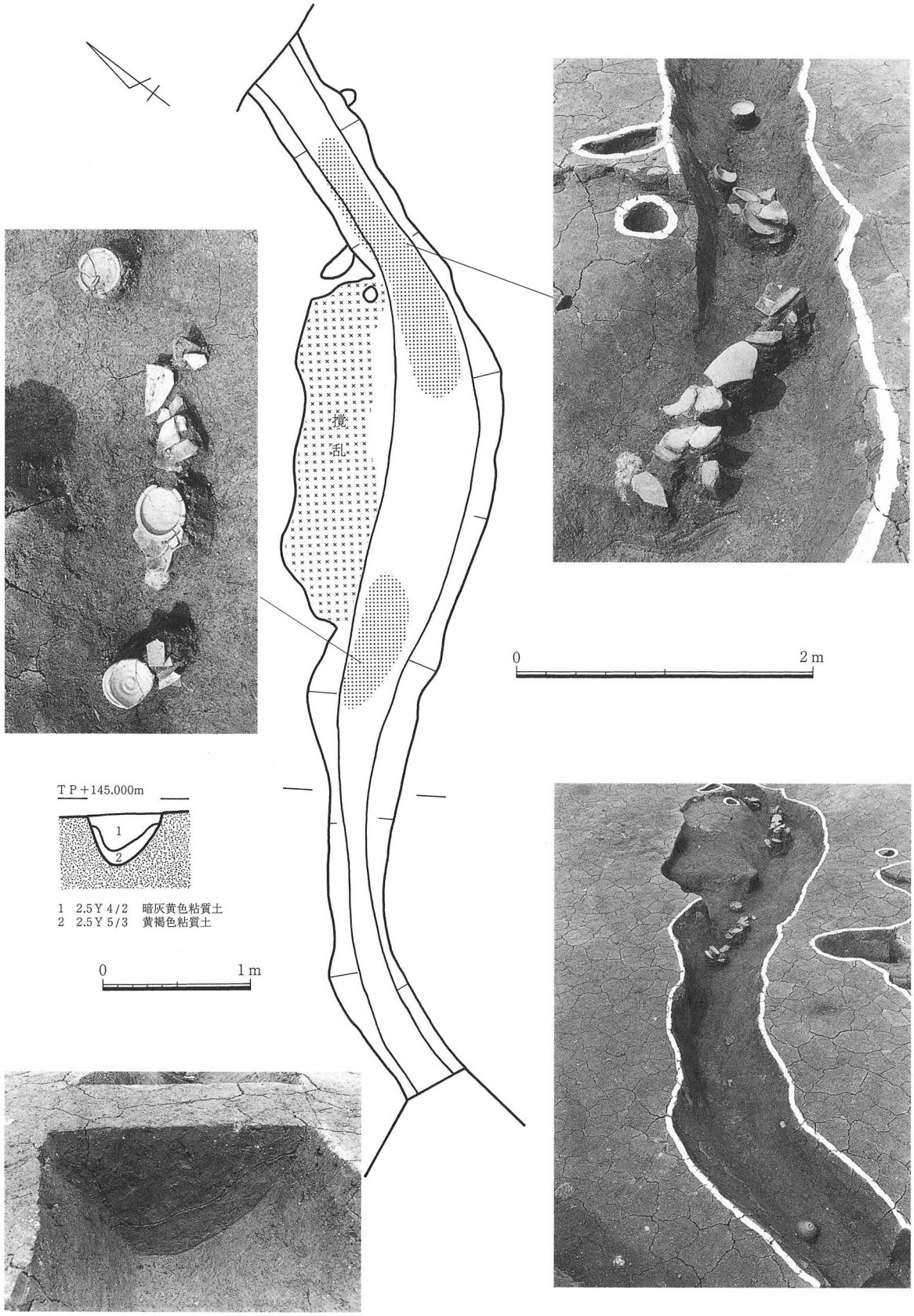
調査区の北端中央部で検出した。３間×２間（6.85m×4.20m）の建物である。柱穴掘形は直径約25.0～40.0cmの円形である。これらの柱穴からは時期を記せるような出土遺物は出土していないが、この建物を構成する柱穴に掘り込まれる溝01の埋土から第９図の１・２のような遺物が出土しており、建物跡01はこれらよりも新しい時期のものであると判断できる。

１は須恵器短頸壺口縁部である。復元口径は10.8cmを測る。２は高台を有する須恵器杯である。復元口径16.7cm、器高5.3cmを測る。高台は外側へと踏ん張るプロポーションを呈する。各々、概して８世紀代の時期を考えたい。これらの遺物を埋土に含む溝01を掘り込む形で柱穴を配する建物跡01の機能年代は８世紀以降と判断できる。

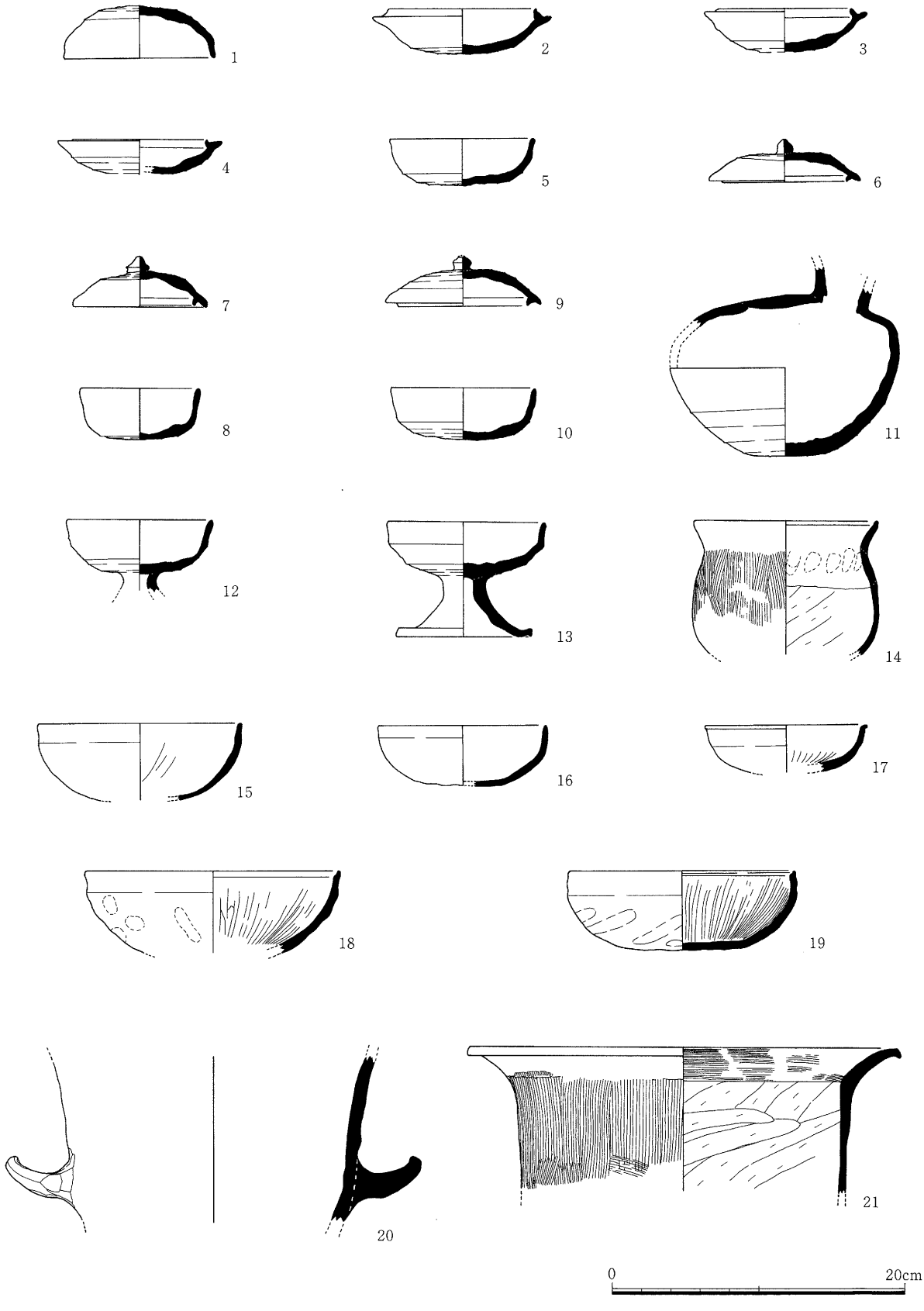
【溝02】

調査区の南西隅から北東斜方向に延伸し、一旦クランクしてそのまま北方向へと延びる。溝は北側へ延びるに従いその深度を浅くし、東西方向に位置する溝に切られる箇所で終焉する。また、溝はクランクする部分で一部攪乱を受ける。溝幅35.0～75.0cm、深さ約35.0cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土層と黄褐色粘質土層の上下２層に分層できる。この黄褐色粘質土上面から須恵器や土師器などの土器が出土した。本調査区で最もまとまって遺物が出土した遺構の１つである。

１から13は須恵器である。１は蓋である。口径10.2cm、器高3.5cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。２は復元口径10.0cm、器高3.1cmを測る杯である。たちあがりは比較的短く内傾し、端部は丸いがシャープなつくりを呈する。受部は外側上方へと延びる。底部に丸みは感じない。３は口径9.2cm、器高2.9cmを測る杯である。たちあがりは先の２に比してより内傾する。４も同じく杯である。口径9.0cm、復元した器高は2.4cmを測る。出土した杯のうちで最も口径・器高が小さい。たちあがりも極めて低い。５は杯である。復元口径9.8cm、器高3.2cmを測る。底部は丸みを帯びず、口縁端部は丸くおさめる。６は宝珠つまみを有する蓋である。口径8.5cm、器高3.0cmを測る。かえりは口縁端部よりもやや下方へ突出する。赤褐色の色調を呈する。７と８はセットをなす。７は宝珠つまみを有する蓋である。口径9.0cm、器高3.5cmを測る。かえりは口縁端部よりも内側におさまる。宝珠つまみは比較的高くしっかりとしている。８は杯である。 口径8.0cm、器高3.5cmを測る。７とセットをなす。９と10もセットをなす。９は口径8.8cm、器高3.4cmを測る。先の７に比して小さい宝珠つまみを有する。かえりは口縁端部よりもやや下方へ突出する。10は杯である。口径9.8cm、器高3.5cmを測る。11は平瓶である。最大径を中位やや上方に測る。扁平な球形の上位一方に口頸を配するが、口縁部は欠損する。体部上位には成形に伴う開口部を塞いだ円板痕が残る。体部上位、肩部には上方から下方へ直線状にひいたヘラ記号のような痕跡が５条認められる。12は高杯の杯部である。杯部口径は9.8cmを測る。脚基部がわずかに残存する。13も高杯である。口縁端部から脚端部まで残存する。復元口径10.5cm、器高7.9cmを測る。杯部と底部の境は明瞭である。基部がやや幅広の外反する脚部



第10図　溝02平面図・断面図及び遺物出土状況写真



第11図　溝02出土遺物実測図

を貼付する。脚端部はやや下方に曲げられる。14から21は土師器である。14は甕である。復元口径12.3cmを測る。体部には縦方向にハケ目が施される。頚部内面には指オサエの痕跡を顕著に留める。15から19は杯である。15は復元口径13.6cmを測る。器高は復元すると5.0cm前後になる。口縁部外面には指ナデが顕著なため、口縁部はやや内傾し上方へと延びる。器面の劣化のため放射状暗文の有無は明確でない。16は復元口径11.4cm、器高4.1cmを測る。17は復元口径10.8cmを測る。口縁端部はやや外側へ曲がる。内面にかすかではあるが放射状暗文が認められる。18は復元口径17.2cmを測る。口縁端部は外側へ傾く。内面には放射状暗文が施される。19は口径15.2cm、器高5.4cmを測る。口縁端部は外側へ傾く。内面には放射状暗文が施される。20は甑、21は甕である。21は口縁部から体部上位のみ残存しているが、長い体部の甕になると考えられる。これら溝02出土遺物であるが、概して7世紀前半から7世紀第3四半期前後頃の時期を考えたい。

【溝03】

調査区の南端中央部からほぼ南北方向へ延びる。この溝のすぐ西側を同様の溝が並走する。これらの溝は先に記した建物跡01の手前でその延伸を止める。溝幅25.0～90.0cm、深さ約15.0cmを測る。この溝、とりわけ南端において土師器皿などの遺物が出土した。図化可能なものは第12図に掲載した。

1から14はすべて土師器である。1・2は他に比して色調が異なり橙色を呈する。1は口径9.3cmを測る。底部は欠損する。ナデ調整が顕著で口縁部から底部にかけて滑らかに曲線的に整形される。2は口径8.7cm、器高2.0cmを測る。口縁部と底部の境界が明瞭である。口縁部内面のナデ調整が特に顕著で、口縁端部はやや内傾する。3は口径8.8cm、器高1.4cmを測る。底部は糸切りされている。胎土には3～5 ㎜ 程度の石英が顕著に混じる。褐色を呈する。4・5は口縁端部が玉縁状を呈する「ての字状口縁」の土師器皿である。各々復元口径10.2cm、9.2cmを測る。乳白色を呈する。6から10は褐色を呈する土師器皿である。6は復元口径9.0cm、器高1.6cmを測る。底部外面に指オサエの痕跡を留め、内面は丁寧にナデ調整がなされる。顕著なナデ調整により口縁部はやや外反する。外面に煤痕が認められる。また、胎土に雲母が若干混じる。7は指オサエの痕跡が顕著に確認できる。口径9.6cm、器高1.7cmを測る。口縁部に顕著な指ナデを施すため口縁部内外面が溝状に窪む。8は口径9.8cm、器高2.0cmを測る。手づくね成形であるが丁寧なナデ調整を施す。口縁端部は玉縁状に近い様を呈する。他の土師器皿のように石英などの石粒がほとんど混在せず滑らかな感が強調され、これらのうちでは趣を異にする。胎土に雲母を含む。9は口径9.3cm、器高1.4cmを測る。内面にはナデ調整が施されているものの、丁寧ではなく仕上がりが粗い。10は先に記した9によく似る。口径9.2cm、器高1.6cmを測る。同様に粗い仕上がりとなる。11は1.0cmを測る高台を有する。口径は14.0cm、器高は3.5cmを測る、内面は丁寧にナデ調整が成されており、端部には沈線が1条巡る。外面はナデ調整が成されるが内面に比してつくりは粗い。口縁端部から約20.0cm下位に粘土継ぎが認められるが、その箇所は指オサエが顕著である。12は小椀である。お猪口のような様を呈する。0.6cm

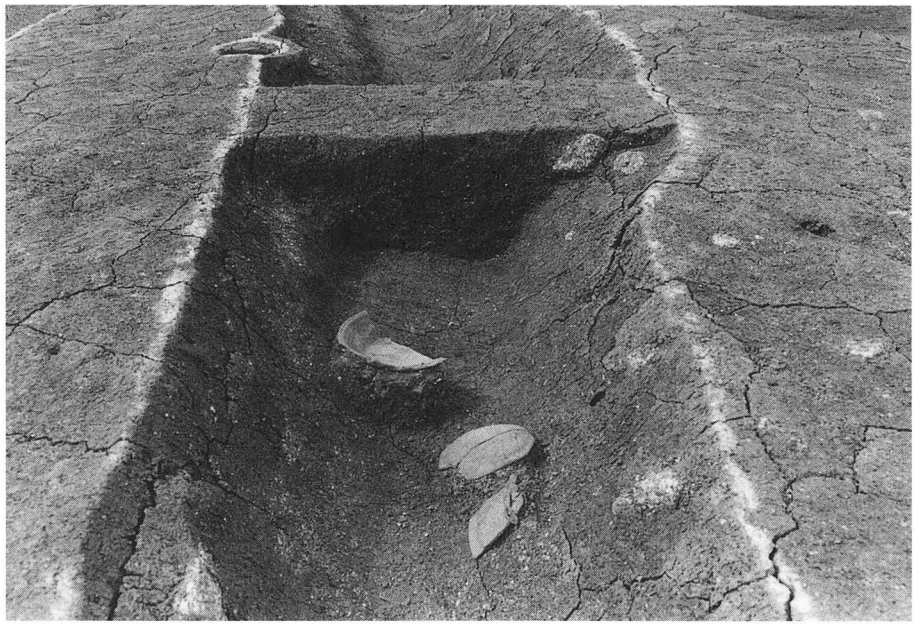
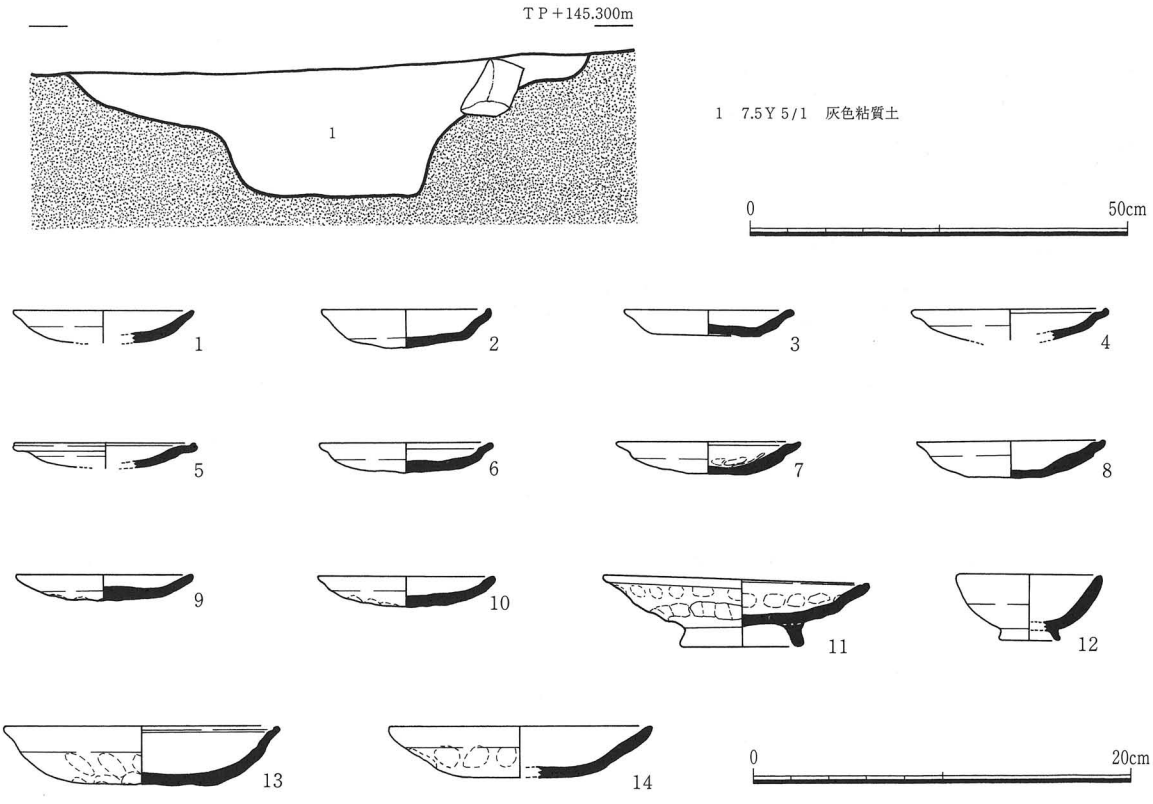
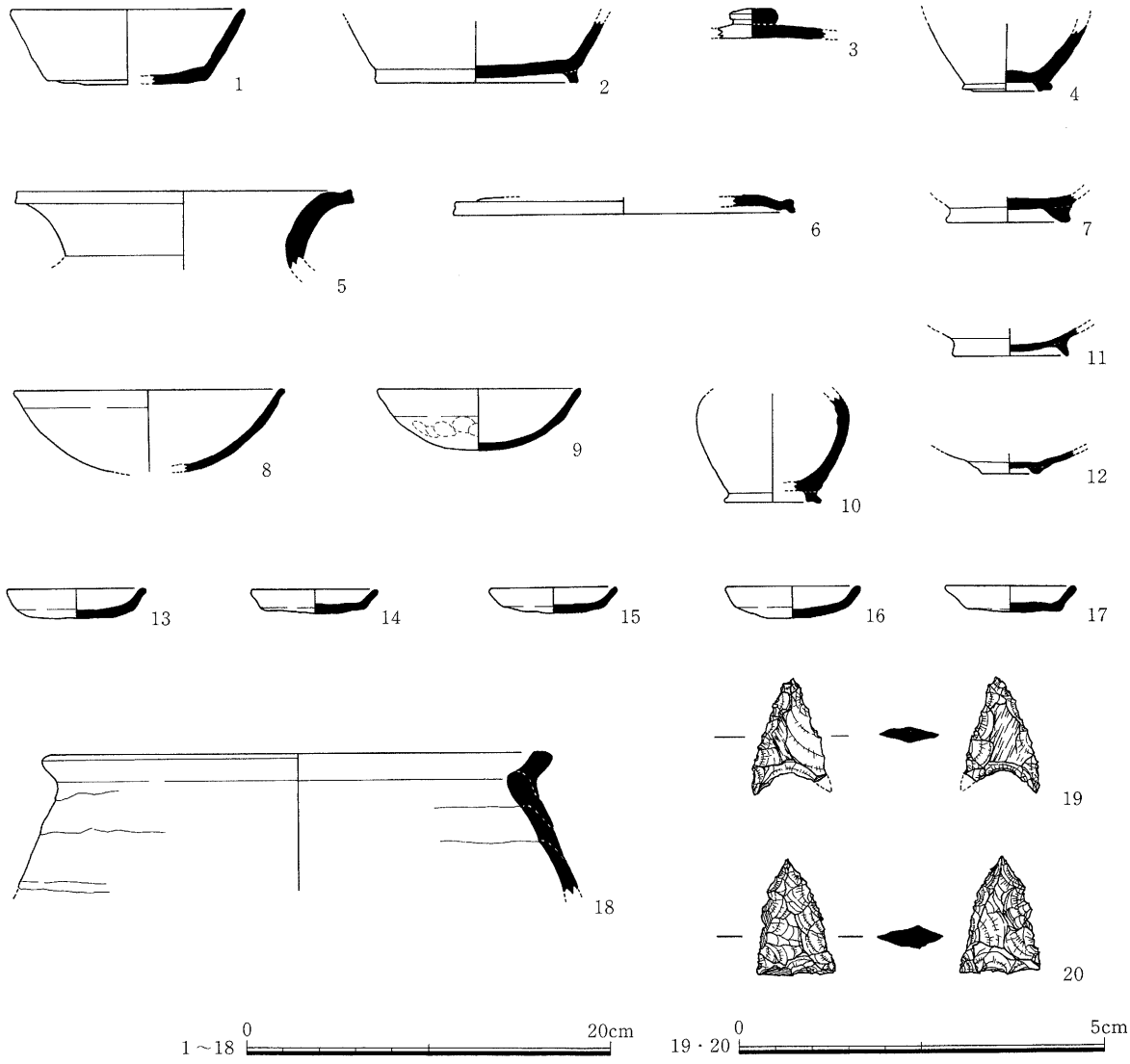


写真７　溝03



第12図　溝03断面図及び出土遺物実測図



第13図　遺物包含層出土遺物実測図

の高台が貼り付けられる。復元口径は7.3cm、器高3.5cmを測る。器面全体にナデ調整を施す。13は復元口径14.4cm、器高3.1cmを測る。口縁部外面に顕著に指ナデを施し、口縁部は外反する。底部には指オサエの痕跡を多く残す。14は復元口径13.7cm、器高2.7cmを測る。胎土は先の13によく似る。以上の土器の時期であるが、概して８世紀後半頃の時期のものを多く含む。ただし、１・２の土師器皿などはもう少し時期を新しくする可能性がある。

（４）遺物包含層出土の遺物

遺物包含層からは土器片を中心に遺物コンテナ約５箱分の遺物が出土した。これらのうち図化できるものを第13図に掲載した。

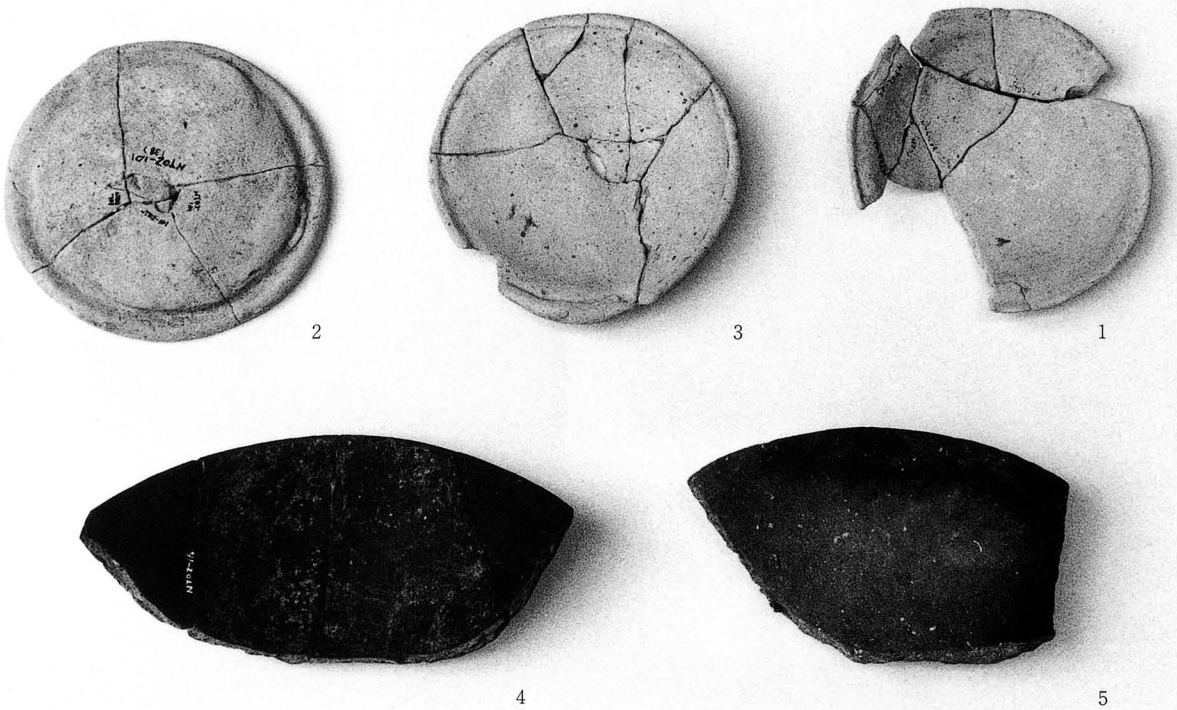
１は須恵器杯である。復元口径12.6cm、器高4.1cmを測る。口縁部と底部の境界は比較的明瞭であ

る。2は高台を有する須恵器杯である。高台は外側へ踏ん張る様を呈する。底径11.0cmを測る。3はつまみを有する須恵器蓋である。つまみは扁平で丸みを帯びる。4は小型の須恵器長頸壺の底部であろう。底部は糸切りのような痕跡が確認できる。底径5.0cmを測る。5は須恵器甕口縁部片である。復元口径は18.1cmを測る。6は須恵器蓋である。つまみを貼付する箇所は欠損する。天井部は比較的低いと考えられる。端部はやや外側へと開く。7は内黒の黒色土器の底部である。底径6.5cmを測る。8から12は瓦器である。8・9は瓦器椀である。各々、復元口径は14.5cm・11.0cmを測る。8は劣化が著しく暗文を図化できない。10の瓦器は小型長頸壺に似たプロポーションを呈する。11・12は高台を有する瓦器椀の底部である。各々、底径6.2cm、2.9cmを測る。しっかりと貼り付けてある11の高台に比して12の高台は高さも低く時期差を読み取れる。13から17は土師器皿である。13は橙色を呈する。口径7.4cm、器高1.6cmを測る。内外面ともに丁寧にナデ調整が施される。胎土に2～5㎜の石粒が混在する。14も橙色を呈するが13よりもやや茶色がかかる。口径6.8cm、器高1.3cmを測る。胎土に石粒を多く含みざらざらした感が強い。15は黄色がかった薄い橙色を呈する。口径6.8cm、器高1.4cmを測る。底面はナデ調整が粗い。16は橙色を呈する。口径7.1cm、器高1.8cmを測る。17は薄い橙色を呈する。口径6.9cm、器高1.4cmを測る。口縁部にナデ調整を顕著に施す。18は羽釜である。鍔の部分を欠損する。19・20は石鏃である。石材はサヌカイトである。楠公誕生地遺跡で発掘調査を行う際は遺物包含層から石鏃が出土することが多い。以上、遺物包含層からは縄文時代・8～9世紀頃・12～14世紀頃と様々な時期の遺物が出土した。

3. おわりに

以上、平成14年度に行った楠公誕生地遺跡の発掘調査の成果概要について記述した。先にも記したように、当遺跡においては過去の調査成果の大半が中世のものであった。また、本村全体を見渡しても中世の時期の遺構・遺物の検出が大半を占める。そのような状況のなかで、今回のように古代の遺構・遺物を検出したことは、本村の歴史を検討するうえで大変貴重、且つ重要な資料の1つとなるであろう。詳細を物語るにはまだまだ資料が不足している。今後の調査に期待したい。

図　　版

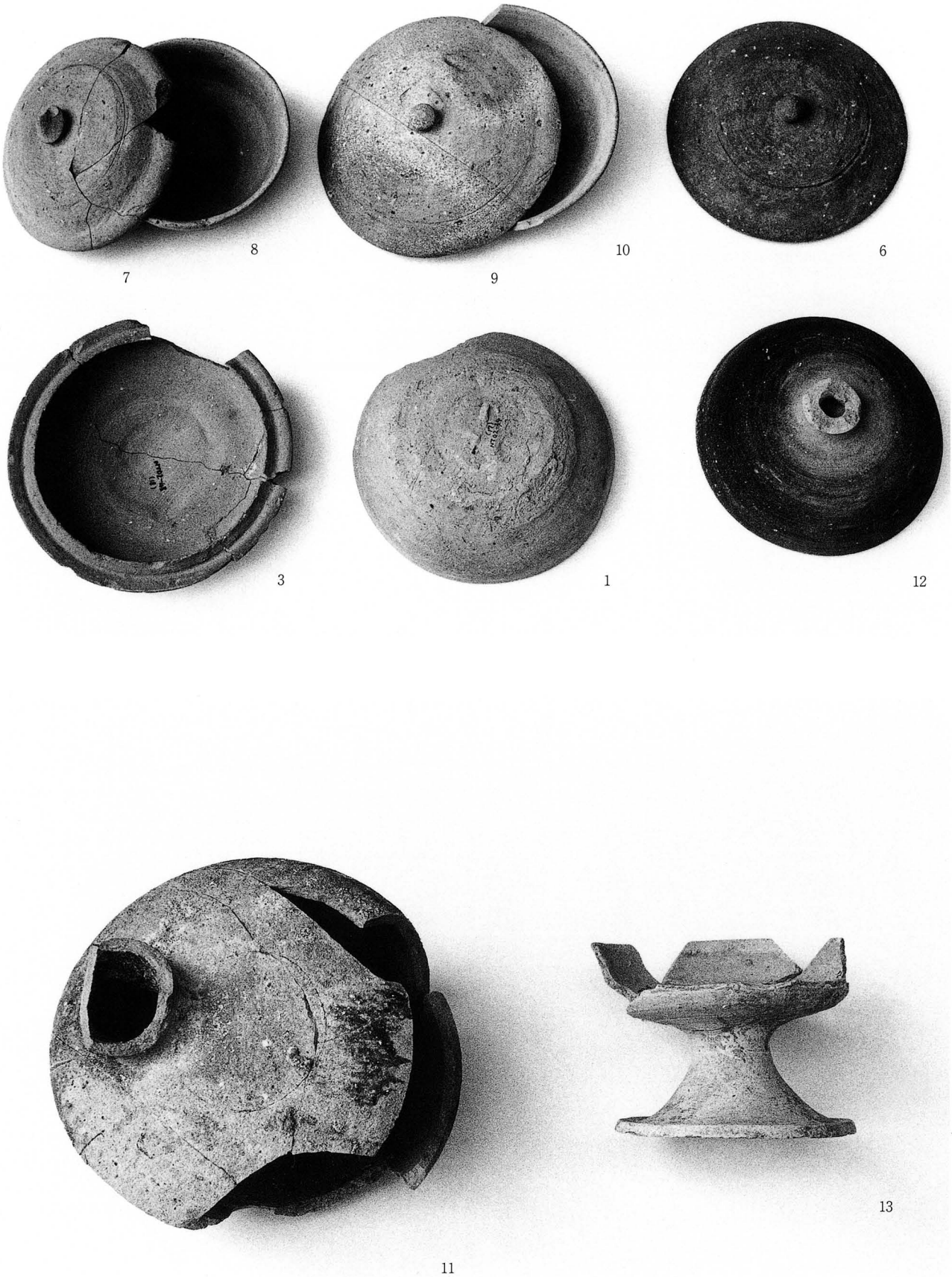


2　3　1

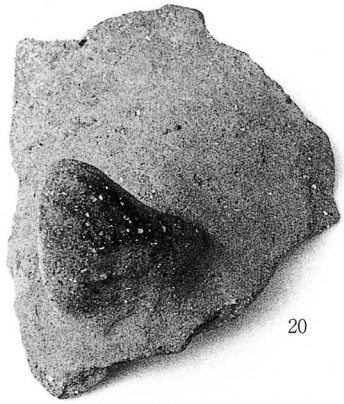
4　5

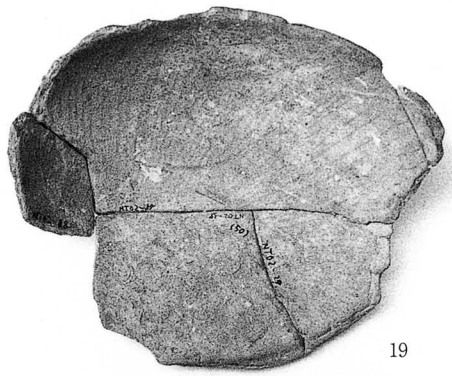
6　7

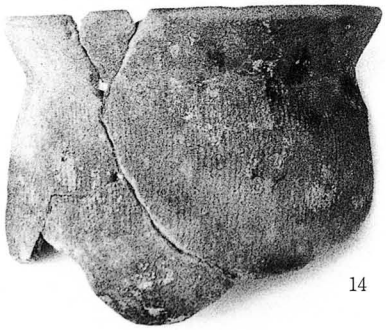
番号は実測図番号に対応（上・下　第７図）



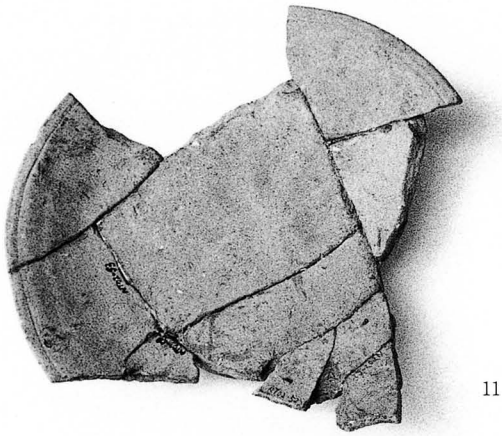
番号は実測図番号に対応（上・下　第11図）


20


19

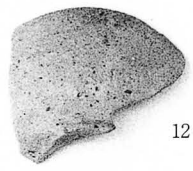

14

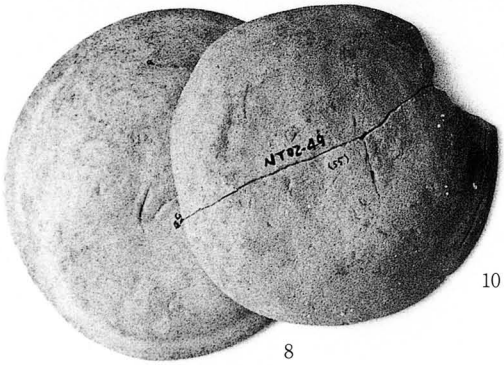
21


11

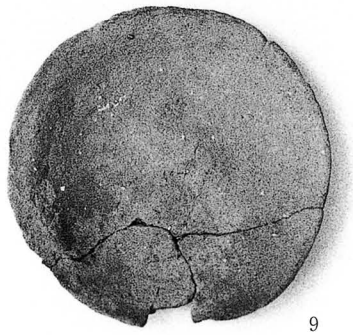
13

5


12

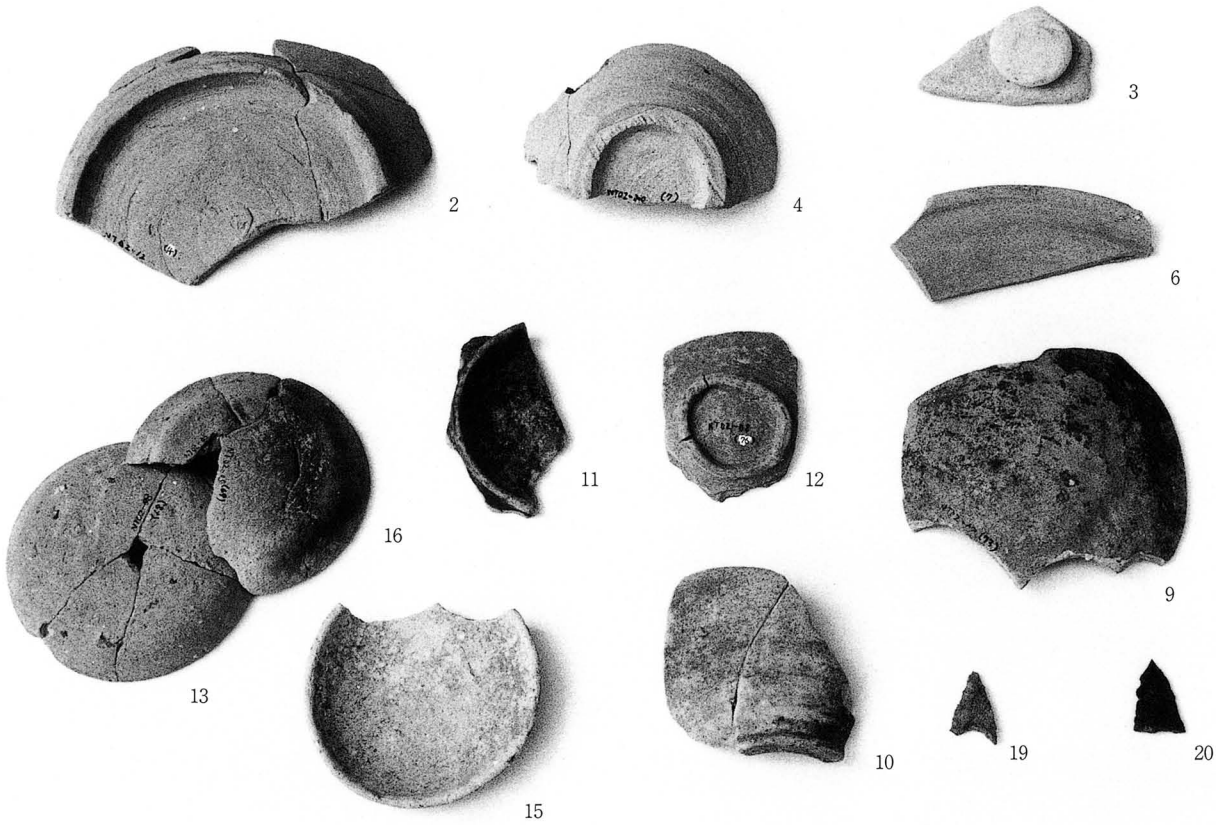

10

8


9

3

番号は実測図番号に対応（上　第11図・下　第12図）



番号は実測図番号に対応（第13図）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たんじょうちいせきはっくつちょうさがいよう
書名	誕生地遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次数	V
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集著者名	和泉大樹
編集機関	千早赤阪村教育委員会
所在地	〒585-0041　大阪府南河内郡千早赤阪村大字水分263番地
発行年月日	西暦2003年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
誕生地遺跡 ＮＴ－０２	大阪府 南河内郡 千早赤阪村 大字水分・ 二河原辺	27383		34° 27′ 38″	135° 37′ 15″	2002.05.07. ～ 2002.07.15.	500 ㎡	福祉施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楠公誕生地 ＮＴ－０２	城館	古代	住居跡 建物跡 柱穴 溝	須恵器 土師器皿 瓦器 他	

誕生地遺跡発掘調査概要Ⅴ

2003年3月31日

発　行　　千早赤阪村教育委員会

千早赤阪村大字水分２６３番地

０７２１－７２－１３００

印　刷　　（株）中島弘文堂印刷所